

第8回CESS（中央ユーラシア学会）年次大会 参加報告記

野 田 仁

CESS（中央ユーラシア学会）第8回大会はワシントン州シアトルのワシントン大学にて、2007年10月18～21日にわたり開催された。筆者にとってはボストンでの第6回に次いで2度目の参加である。前回は単独での参加（実際の所、日本からの参加は私のみだった）であったのに対し、今回は最初からパネルを組んで臨んだので、まったく違った気持ちでアメリカへ発つこととなった。同行の菅原純氏（東京外大AA研）と共に夕刻の成田を離れ、朝に逆戻りして着陸するとそこはシアトル近郊のタコマ空港である。そこからバスに乗り込み、市内へ向かうと、われらがイチローの活躍するセーフコ・ドームが目に入ってきた。中心部で大学地区へのバスに乗り換えるとじきに大学街にたどりつく。この日（10月18日）は参加登録と簡単なレセプションが予定されていた。

翌19日からセッションが開始される。以下、筆者が実際に聞いたセッションを中心に簡単に内容を紹介してみたい。ただし、筆者の関心に従い、近代以前の歴史にかかわるセッションが中心となっている。なおプログラムはCESSのウェブサイト上（<http://www.cess.muohio.edu/index.html>）で閲覧が可能である。全体の雰囲気や略号などについては、本誌前号の小沼孝博氏による参加記もご参照いただきたい。

19日

HC-02 Migration and Diaspora

最初の報告者はいきなりNo-showで、司会者が名前を呼んでも姿を見せなかった（事実、申し込みが4月と早く締め切られているためか、当日現れない参加予定者はかなり多い印象がある）。

○A. Diener “Historical Antecedents of Territorialization in Post Soviet Space”

カザフスタンのドイツ系住民を例にとった、ポスト・ソビエト期のディアスポラについての考察。故地へ帰還した者と残留した者とを比較し、両者の共通の「ふるさと」としてカザフスタンという国が存在することを強調した。

○ Y. Demirag “Russian and Ottoman Policy toward Crimean Tatars in the 19th century”

クリミアとロシア・トルコとの関係についてまとめるもやや概説的。コメントのE. Lazzerini氏は、ヴォルガ・タタールの移民との比較の観点から質問をしていた。

○ B. Levey “Migration of Han Settlers from Gansu to Xinjiang: 1761-1780”

清朝の満洲における漢人入植の禁止策と西北における甘肅から新疆への移住の動きとを比較したもの。

参加者の中から、このセッションに関連して、中央ユーラシアのひとつの特質として「moved society」であることが挙げられる、との言葉があり印象に残った。

HC-05 Russia’s Muslims and Eurasian Networks

○ U. Shamiloglu “Muslim Networks in Eurasia During the Golden Horde and the Later Golden Horde”

ベレケ・ハンの改宗を基点とするジョチ・ウルスの領域のイスラーム化についての報告。カザン・ハン国のヤサヴィーヤ、チンギス裔とサイイドの通婚の意義、シャイバーン朝アブドゥッラー2世時代のブハラ・ウルゲンチ・シベリアのサイイドの移動にまでその関心は及び、聴衆の興味を引くに足るものであった。

○ M. Tuna “From Ulama to a Muslim Intelligentsia in Imperial Russia”

ヴォルガ地域を中心とするウラマーたちの新方式教育の活動について。

○ M. Gokcek “Trans-Imperial Discourses of Nationalism and Religion: The Contributions of a Kazan Tatar to Turkish Nationalism”

ユースフ・アクチュラをはじめとするロシア帝国からオスマン朝へ移住し活動した知識人の役割についての報告。その他にはハビーブザーデ・エルチベイの活動に焦点を当てていた。

HC-01 Crossing Cultural Borders

○ S. Ertan “Trajectories of Cultural Symbiosis in 17th century Istanbul/Constantinople”

イスタンブルのユダヤ人コミュニティについて。

○ G. J. Breyley “Music and Postwar Reconciliation in Iran: Pop Mourning with Abdol Reza Helali”

イラン・イラク戦争の記憶を考える際に、戦後のイランにおいて、どのように音楽やパフォーマンスが用いられているかを考察したもの。

○ R. Harrell-Bilici “Uzbek Literary Voices in Transition: The Case of Ulugbek Hamdam’s ‘Muvozanat’”

ウズベキスタンにおいて、ナショナリティーとナショナリズムがどのように民族アイデンティティーと関わりを持つようになったかを文学を通して分析。

○ S. Wickham-Smith “The Negotiation of Cultural Difference in the Translation of Contemporary

Mongolian Literature”

文学の翻訳は、cultural exchangeであるとの主張。とくに押韻する詩を翻訳する際に、それが問われるということだった。

なお、全体としてコメンテーターを置くセッションが多く、まとめの議論に資している様子であった。このセッションについて言えば、表象文化という枠では共通するものの、扱う地域も多様な各報告に対してコメンテーターは腐心していたように記憶している。

また、同時間帯のHC-13は言語学のセッションで、西岡いずみ氏（九州大学）の報告があった。タイトルは“Demonstrative pronouns in modern Uyghur”で、現代ウイグル語の指示代名詞が、距離（proximalかdistalか）に応じて二つのグループに分けられるということ、また話法に拠っても区別されるというものであった（菅原純氏のご協力により配布資料を入手し得た）。

セレモニーの時間

この日の夕方は皆が大ホールに集まり、式典の部が執り行われた。学長氏の挨拶などがあり、長年ホスト役を務めようやくその責務から解放されたJ. Schoeberlein氏に惜しみない拍手が送られた。優れた出版に贈られる賞にはMarianne Kamp氏が輝いた（賞の名前は失念。おそらく次のモノグラフに対してのことと思われる。*The new woman in Uzbekistan : Islam, modernity, and unveiling under communism*, Seattle: University of Washington Press, 2006）。

基調講演はRogers Brubaker氏による“Nationalizing States Revisited”で、淀みのないスピーチはかえって耳に心地よかったのか、私の意識は失われがちであった。氏の主張については、さしあたり岡奈津子「民族と政治」『現代中央アジア論』（岩崎一郎、宇山智彦、小松久男編著）日本評論社、2004年、81-102頁を参照されたい。

記憶をつなぎ合わせると、大要は以下の通りであった。主題は旧ソ連領内のエスノ・ナショナリズムである。氏はpolicy、practice、processの三つのPに注目しつつ、ナショナル・アイデンティティーに必要な要素を検証していった。その中では、エスノ・カルチュラルな「ナショナリティー」や（大学等の）教育などが大きな役割を果たしている。さらに上記の三つのPには5つのdomainが必要であり、とりわけ言語の持つ意義を強調していたように見受けられた。また、どのようにナショナリティーが語られるのか、というnarrative domainも不可欠のものであるということであった。最後に、氏の方法論は旧ソ連世界をcaptureする一つのやり方であるとの言葉で講演は締めくくられた。

余談だが、学会期間中に出版社がブースを設けているのは日本の学会と同じである。割引きをしているのも同様。

20日

HC-08 New Research on Central Asia in the 18th and 19th Centuries

○N. Kilic-Schubel “Women, Gender and the Literary Milieu in the Khoqand Khanate”

インディアナ大学の出身者を中心に構成されたこのセッションは、フェルガナ地方の歴史に焦点を当てるものであった。最初の報告者は、ウラテパ生まれの女性詩人Dilshadaの著作を分析し、当時のジェンダーの区別にも言及した。

○S. Levi “The Altun Beshik Legend and Political Legitimacy in the Khanate of Khoqand”

アーリム・ハンの時代に強力なハン国が形成され、アルトゥン・ベシク伝説の成立は、ハン権力のauthorizeにつながったと主張。マフドゥーミ・アアザムの系統と、バーブルに連なるアルトゥン・ベシクの系統との関係がどのようであったかについて質問がなされた。

○R. Sela “The Ferghana Valley in the 18th-19th centuries: A View from the Tadhkira-i Majdhub Namangani”

ウズベキスタンに所蔵されるナマンガニーの著作の写本の紹介。18世紀前半についてのコーカンド・ハン国の状況は良く分からないが、それは19世紀の語りに拠らざるをえないことが原因のひとつであることを指摘した。

HC-03 Russia’s Steppe Frontier: Kazakhs in the Multi-ethnic Russian Empire

○M. Bilz-Leonhardt “Orenburg Elites in the Wake of Russia’s Colonization Project”

このセッションはドイツ語圏からの参加者で構成されており、欧州からの参加がさほど多くない中で特徴のあるセッションになった。最初の報告者は1850～1926年という大きなスパンで、植民者としてのロシア人とそれに対峙するカザフ人の関係を論じた。どうしても広く浅い話しになりがちで、その時代設定には質問が寄せられていた。

○B. Eschment “Neither Barbarians, Nor Noble Savages: The Russian View on the Kazakhs of the Empire”

18世紀以降の小説など、その当時に人気を博していた文献に注目し、ロシア帝国におけるカザフのイメージを探るもの。民族誌的な情報を多々含む事はもちろんだが、やはり「遊牧民*kochevnik*」に対するネガティブなイメージがあったことを強調していた。ディスカッサントのS. Sabol氏は、19世紀におけるロシア政府によるカザフ草原植民地化のための理論付けとしての役割があったのではないかとコメントした。

○J. Happel “The revolt of 1916: Tsarist Policy and Nomadic Lebenswelten”

1916年のカザフ草原における反乱について、土地所有の問題や、中国への逃亡などにも言及しつつまとめる。

SO-20 Roundtable: Bridging Europe and US in Eurasian Studies

○ P. Akcali, A. Priego, H. Kahveci の各氏による討論形式

アンカラの中東工科大学で2007年夏に開催された ESCAS (The European Society for Central Asian Studies) 第10回大会の紹介。Schoeberlein氏による基調講演は、中央アジア研究が、ソヴィエト学の遺産にとどまっているという指摘であったという。その他注目すべき発表について簡単に紹介があった。問題点としては、現地および西欧の学界間の関係、地理学への関心の低さ、米国を中心とするCESSと欧州のESCASという二つの学会の両立の難しさ、ホストとなる研究機関の欠如などが指摘された。次回はライデンで開催されるとのことである。

21日

SO-02 Central Asian Studies in Light of Imperialism: A Neo-Orientalist Approach within Western Academia

○D. Sneath “The Discourse of Tribalism and the Headless State: Evolutionist Social Theory and the Misrepresentation of Nomadic Inner Asia”

トインビーの遊牧論に代表される遊牧社会についての理論をまとめながら、各地の遊牧社会を分析。カルピニの記録を、はじめての欧州人による言及とみなし評価する。19世紀のロシアが、カザフやクルグズに対して、系譜に基づく kinship society であるとみなしていた、との指摘は興味深く思われた。

○B. Potrata “Circumventing Orientalism in Studying Traditional Medicines in Central Asia”

とくになし。

○R. L. Bowman “American University of Central Asia (AUCA): Comparative Access to Education and Advancement”

クルグズにおける英語教育とAUCAの成功例について。とくに地元のイニシアチブに重きを置いた点が成功の原因であると分析。トルクメニスタンで同様のタイプが成功するかどうかを検証した。

HC-07 Law on the Imperial and Cultural Frontier: 19th-20th Century Legal documents from Xinjiang and the Qazaq Steppe

期せずして自らのセッションが最終時間帯に入ってしまったが、これには聴衆が少ないという大きな欠点があった。参加申し込みの際に時間帯の希望も伝えることができるので、初日と最終日は避ける方が何かと好都合かも知れない。

さて、このセッションは菅原純氏のイニシアチブにより、堀直氏（甲南大学）、野田が参

集し、さらにディスカッサントとしてJ. A. Millward氏を、チェアーとして中見立夫氏（東京外大AA研）を迎え構成されたものであった（なお、各報告者は第44回野尻湖クリルタイでの報告を発展させて臨んだ。クリルタイ時の報告については『東洋学報』第89巻第3号の彙報（村上信明氏による）を参照されたい）。残念ながら堀氏は直前に参加を取りやめることになったが、代わって、中見氏に日本の中央ユーラシア研究の変遷についてまとめていただき、中国や旧ソ連の文書史料を利用する機会が増えてきた近年の動向を踏まえた上で発表に移ることができた。

○菅原純 “Tradition and Adoption: The Sinicization of Legal Documents in Turkic Traditional Society in Provincial Xinjiang (1884-1955)”

清朝から中国にいたる時期の新疆省におけるカーディ文書（テュルク語）、土地契約文書（漢語）をとくにその書式に注目して分析した（総数600点を超える）。それにより、50年代までイスラーム法にもとづく「伝統」的な社会システムが保持されていたが、漢語文書の様式の影響も受け、次第に脱イスラーム化も進行していたことを示すものであった。

ロシア帝国時代のサマルカンドの文書との比較で、年号をどのように記すのかが、帝国の影響力を反映する指標になるのではないかという指摘があった。

○野田仁 “The Qazaq Nomadism Reflected in the Imperial Documents: Between the Qing and Russian Empires, 19th Century”

清朝の珈案史料とロシア帝国の文書史料を比較し、18世紀後半以降、とくに19世紀前半におけるカザフ社会の変化について検討した。清朝とロシアの記録のずれに注目し、そこに社会システムの変化を読み取ろうとする試みであった。

文書の書き手、使用言語や、帝国の統治がどれほど現地社会に影響を及ぼしたのかについて質問があった。

昨年に続く日本からの参加者を主とするセッションとなったが、少なくとも日本の研究を紹介するという役割は果たせたのではないだろうか。

全体を振り返って見ると、概説的な発表も多いが、それでも米国における新しい研究の動向の一端を知ることも可能であるという意味で、貴重な機会と言うべきである。とくに外国語での発表経験の少ない若手研究者にとっては、得がたい体験ができる場となろう。2008年は、イッシククル（クルグズスタン）での現地開催大会と、ジョージタウン大学（ワシントンDC）での年次大会の二つが変則的に予定されている。

（日本学術振興会特別研究員・財団法人 東洋文庫）